

# 非行を抑制する要因とは:N大学生へのアンケート調査から

著者	佐藤 みゆき, 菊地 麻友
抄録	本研究では長瀬らの調査(2008)によって明らかにされた思春期の少年非行抑制の要因の8クラスターを基にし、それをN大学生を対象とした調査により検証した上で、非行の抑制に必要な要因は何かを考察した。その結果、本調査では非行抑制に最も効果的であったのは「非行はやってはいけないものという理解」(非行行動に対する道徳的理解)であった。非行を抑制するためにはこの「道徳的理解」を家庭や学校などで推進する教育が望まれる。また、「非行を行いたいと思ったがしなかった」層が環境に非行抑制要因がほとんどなかったことが判明し、一見非行と関係のない「よい子」への危惧が推察された。本研究により、長瀬らのいう「非行念慮」という状態に着目し、非行をせず悩みを表出できない子へ目を向けることの重要性が示唆された。
雑誌名	名寄市立大学社会福祉学科研究紀要
巻	4
ページ	59-74
発行年	2015-03-31
出版者	名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科
ISSN	21869669
書誌レコードID	AA12592911
論文ID (NAID)	110009900746
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1088/00001599/">http://id.nii.ac.jp/1088/00001599/</a>



非行を抑制する要因とは  
—N 大学生へのアンケート調査から—

佐藤 みゆき

名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科 准教授

菊地 麻友

札幌市白石区保健福祉部保護四課

---

【要約】

本研究では長瀬らの調査(2008)によって明らかにされた思春期の少年非行抑制の要因の 8 クラスターを基にし、それを N 大学生を対象とした調査により検証した上で、非行の抑制に必要な要因は何かを考察した。その結果、本調査では非行抑制に最も効果的であったのは「非行はやってはいけないものという理解」(非行行動に対する道徳的理解)であった。非行を抑制するためにはこの「道徳的理解」を家庭や学校などで推進する教育が望まれる。また、「非行を行いたいと思ったがしなかった」層が環境に非行抑制要因がほとんどなかったことが判明し、一見非行と関係のない「よい子」への危惧が推察された。本研究により、長瀬らのいう「非行念慮」という状態に着目し、非行をせず悩みを表出できない子へ目を向けることの重要性が示唆された。

Keywords : 非行抑制要因 非行行動に対する道徳的理解 「よい子」の非行

---

はじめに

犯罪白書（平成 26 年版）によると、2013 年の少年による刑法犯の検挙人数は 9 万 413 人（前年比 10.6%減）、犯罪少年による特別法犯（交通法令違反を除く。）の送致人員数は 5,830 人（前年比 11.4%減）である。その中でも軽犯罪法違反は 2007 年から急増し、2013 年は 2,965 件であり、特別法犯の中で最も高い比率（50.9%）を占めている。2013 年の少年保護事件の家庭裁判所新規受理人員は、一般保護事件（道交違反に係るもの以外の少年保護事件）で 97,355 件である。

最近では「遊び型非行」などと呼ばれる罪の意識の低い犯罪も増え、非行は特別な少年のものではなくなっており、非行少年も珍しいものではなくなったと考えられる。

著者は少年非行に常日頃関心があり、特に自分と同世代の人が「なぜ非行をしてこなかったのか」を知りたいと考えた。

長瀬らは 2008 年、大学生を対象に調査を行い、「非行経験（非行を行ったことがあるか）・非行接触（周囲の友人に非行を行っていた人がいたか）・非行念慮（非行を行いたいと思ったことがあるか）」についてそれぞれの有無をたずねた。また、自身の思春期における非行行動抑制理由を自由記述式の回答により得た。さらに、自由記述を分析して得られた結果から非行抑制に関わる要因を「非行行動に対する道徳的理解」「現在・将来の目標・夢」「社会のなかで生きていくスキル」「ポジティブな感情体験」「日常生活における居場所の存在」「所属するコミュニティとの関係性」「適応的な集団への所属」「非行行動の意味との直面化」という 8 つのクラスターに分けたが（長瀬・桂川・藤井他 2011:69-79）、これらのクラスターは著者自身の経験上も、納得しうるものであった。

また、松井らが非行を抑制する恥意識に関する研究で、「他者や社会に関心を向けていることが恥意識に影響している」と述べていることから（松井 2005:35）、非行抑制と地域・社会への関心度との関連性についても関心をもった。

本研究では長瀬らの研究を基にし、著者が所属する N 大学生を対象とした調査を行い検証した上で比較検討する。さらに、非行状況と地域・社会への関心度の関連性を調査し、非行の抑制に必要な要因は何かを考察していく。

## I 先行研究と問題意識

長瀬らは 2008 年 4 月に首都圏の 4 年生大学の 1-4 年生計 311 名を対象とし（有効回答者数計 305 名 男性 150 名、女性 155 名）、自身の思春期における非行との関わりについて「非行経験（非行を行ったことがあるか）・非行接触（周囲の友人等に非行を行っていた人がいたか）・非行念慮（非行を行いたいと思ったことがあるか）」の有無を聞いた。「非行経験」や「非行接触」について聞く調査はこれまでもあったが（小保方 2004 等）、長瀬らが挙げた「非行念慮」の概念は新しく、非行抑制について研究を行う上で示唆に富むものである。

また長瀬らは、上記質問による回答を基に、回答者を男女別、個人の非行との関わり別に「非行脱却群（非行を行ったことがあるが、やめることができた者：非行経験あり）」、「非行抑制群（非行を行いたいと感じたが、行動を抑えることができた者：非行経験なし、非行

念慮あり)」、「非行無関心群(非行を行ったことも、行いたいと感じたこともない者:非行経験なし)の3群に分けた。

さらに長瀬らは先の調査の自由記述式の回答から、「自身の思春期における非行行動抑制理由」について、「非行行動に対する道徳的理解」「現在・将来の目標・夢」「社会のなかで生きていくスキル」「ポジティブな感情体験」「日常生活における居場所の存在」「所属するコミュニティとの関係性」「適応的な集団への所属」「非行行動の意味との直面化」の8クラスターを得て、表1のように、先の男女別の3群各々について関連の深いクラスターの順位付けを行った(以上、長瀬・桂川・藤井他 2011:70 による)。

表 1-1 男女別頻出クラスター

順位	男 n=150	女 n=155
1	社会の中で生きていくスキル	日常生活における居場所の存在
2	非行行動に対する道徳的理解	現在・将来の目標・夢
3	ポジティブな感情体験	所属するコミュニティとの関係性
4	適応的な集団への所属	非行行動の意味との直面化

表 1-2 各群における頻出クラスター(男)

順位	男 非行脱却群 n=42	男 非行抑制群 n=20	男 非行無関心群 n=88
1	社会の中で生きていくスキル	非行行動に対する道徳的理解	所属するコミュニティとの関係性
2	非行行動に対する道徳的理解	現在・将来の目標・夢	適応的な集団への所属
3	ポジティブな感情体験	ポジティブな感情体験	社会の中で生きていくスキル

表 1-3 各群における頻出クラスター(女)

順位	女 非行脱却群 n=16	女 非行抑制群 n=19	女 非行無関心群 n=120
1	非行行動に対する道徳的理解	適応的な集団への所属	日常生活における居場所の存在
2	現在・将来の目標・夢	現在・将来の目標・夢	所属するコミュニティとの関係性
3	ポジティブな感情体験	非行行動に対する道徳的理解	社会の中で生きていくスキル

長瀬・桂川・藤井他(2011:73)より著者修正

非行抑制要因の研究では従来「恥意識」と関連の研究が多かったが、このようにクラスターを抽出した例はなく、これを用いて本研究では、著者らの所属する大学生を対象にし

て非行抑制に最も影響のあったクラスターを検証したいと考えた。

また、松井らの非行を抑制する恥意識に関する研究では、「他者や社会に関心を向けていることが恥意識に影響している」と述べられている（松井 2005:35）。永房は「中学生、高校生、大学生のどの世代でも、『世間』に対して近い心理的距離をもっている者ほど、高い恥意識をもっている」と述べ、これは「世間への肯定感と恥意識の強さの関係を示す」とした（永房 2004:42）。松井らや永房らは恥意識と社会への関心度に注目したが、本研究では非行抑制要因と社会の関心度の関連性について探索したいと考えた。

## II 調査の概要と調査結果

### 1 調査の概要

2013年6月4日から7日までの期間、N大学第3学年3学科（A学科、B学科、C学科）に調査票を配布し121人から回答を得た。回収率は全体で85.8%（A学科78.8%・B学科80.5%・C学科98.0%）であった。回答者内訳は表1の通りである。

表2 回答者内訳（無効15票を除く）

	A学科	B学科	C学科	合計（人・%）
男	3（2.8）	2（1.9）	14（13.2）	19（17.9）
女	30（28.3）	28（26.4）	23（21.7）	81（76.4）
性別不明	4（3.8）		2（1.9）	6（5.7）
合計	37（34.9）	30（28.3）	39（36.8）	106（100.0）

調査対象として大学生を選定した理由は、本研究の基となった長瀬らの研究が、「自身の考えや行動の言語化が十分に可能であると考えられる」（長瀬・桂川・藤井他 2011:76）大学生を対象としていることに加えて、大学生という時期が、思春期を終え社会に出るまでの準備期間として、自分を振り返りやすい時期であると考えたからである。

調査項目は「質問1：中学生時の自分に当てはまると思うもの（複数回答）」「質問2：中学生時の社会への関心度」「質問3：中学生時の非行状況」「質問4：中学生時に非行を行わなかった・続けなかった理由（単回答）」の計4問である。

振り返る対象時期を「中学生時」としたのは、先行研究である長瀬らの質問が「思春期」の頃を想定しており、また世代別非行少年率は、思春期に相当する14-16歳にピークとなり、その後は次第に非行から遠ざかることが明らかにされているからである（法務省 2012:96等）

先ほど述べた、長瀬らの8クラスターは、「質問1：非行抑制要因（中学生時の自分に当てはまると思うもの）」の回答項目としてより具体的な表現に直して使用した（表2）。

表3 本研究の回答項目と長瀬らの8クラスターとの対応表

「質問1：非行抑制要因」の回答項目	該当する長瀬らのクラスター
1 非行はやってはいけないものという理解	非行行動に対する道徳的理解

2 非行をしている友達がいなかった	適応的な集団への所属
3 非行をやる意味がわからなかった	非行行動の意味との直面化
4 現在や将来の目標、夢	現在・将来の目標・夢
5 社会や学校、クラスに適応する能力	社会のなかで生きていくスキル
6 (褒められることや勉強や部活で成果をあげるなど、)ポジティブな感情体験	ポジティブな感情体験
7 日常生活における「居場所」(友達、家族、学校、部活、塾など)	日常生活における居場所の存在
8 所属するコミュニティ(家族、友達グループ、部活仲間など)との良い関係性	所属するコミュニティとの関係性

先にみたように松井らは「他者や社会に関心を向けていることが恥意識に影響している」と述べ(松井 2005:35)、永房は「中学生、高校生、大学生のどの世代でも、『世間』に対して近い心理的距離をもっている者ほど、高い恥意識をもっている」とし(永房 2004:42)、世間への肯定感と恥意識の強さの関係を示した。このことから「質問 2:中学生時の社会への関心度」では、中学生の非行状況と社会への関心度について調査するため、久世ら(1988)が行った「社会的事象への無関心」に関する調査項目を参考に、「ニュースや新聞を読む」「ボランティアへの参加」「近所や地域の人への挨拶」「近所の人の名前や顔を知っていたか」「地域の行事(祭りの出し物や町内会・子供会など)への参加」という5つの調査項目を設定した。

また長瀬らは、犯罪・非行行動の性差の影響を示す多くの先行研究(小林 2003 等)をふまえて、調査結果を基に、回答者を男女別、個人の非行との関わり別に「非行脱却群(非行を行ったことがあるが、やめることができた者:非行経験あり)」、「非行抑制群(非行を行いたいと感じたが、行動を抑えることができた者:非行経験なし、非行念慮あり)」、「非行無関心群(非行を行ったことも、行いたいと感じたこともない者:非行経験なし)の3群に分けたが、これを参考にし、「質問 3:中学生時の非行状況」について調査項目を、「非行を行っていた」「非行を1、2回行ったことがあるがすぐにやめた」(上記「非行脱却群」に該当)「非行を行いたいと思ったがしなかった」(上記「非行抑制群」に該当)「非行をしようとも思わなかった」(上記「非行無関心群」に該当)の4つとした。

さらにここでは非行の定義として、刑罰法令に違反・抵触しているか否か、他者に著しい迷惑をかけているか否かなどを基準として木村が分類した、「親たちの会で問題とされる非行・問題行動の類型」(木村 2011:37)と、小保方らの調査で非行傾向行為としてあげていた、『タバコをすう』、『病気などの理由がないのに学校をさぼる』、『親にかくれて酒やビールを飲む』、『子どもだけで夜おそくまで街の中で遊ぶ』、『店の品物をお金を払わずにもってくる』、『よその人の自転車を盗んだり、かってに使ったりする』(小保方 2004:91)を参考にし、「行えば警察等に捕まる重めの非行」を集め、「無銭飲食・暴力団などと関係をもつ・飲み屋街への出入り・万引き・ケンカして怪我をさせる・覚せい剤・シンナーなどの使用・無免許運転・援助交際・風俗店勤務など・バイクなどでの暴走行為 など」とした。

「質問4：中学生時に非行を行わなかった・続けなかった理由（単回答）」では、長瀬らの先に述べた8クラスターを、質問に合わせた表現にし、選択項目とした。たとえば、長瀬らの「社会の中で生きていくスキル」は「社会や学校、クラスの中でうまくやれていたから」といったように表現を変えている。

## 2 倫理的配慮

本調査の実施にあたっては著者の所属大学倫理委員会に申請し、事前の承認を得ている。調査結果は統計的に処理されること、回答は任意であること、結果は研究目的以外に使用せず、回答用紙は調査責任者において厳重に管理し、データ集約後速やかに廃棄する旨を書面と口頭で説明を行い、対象者の同意を得た上で行った。

## 3 調査結果

### (1) 非行抑制要因

「問1：非行抑制要因」では、中学生時の自分に当てはまると思うものについて、選択肢を示し、回答を求めた（複数回答・制限なし）。回答者の環境にどのような非行抑制要因が備わっていたかを知るためである。選択肢は前述のとおり長瀬らの研究で得られた8つのクラスターを参考にした。結果は表3の通りである。

表4 中学生時の非行抑制要因（男女別）

（回答総数/回答者総数）

	男	女	性別不明	合計(人・%)
1 非行はやってはいけないものという理解	14(13.2)	60(56.6)	6(5.7)	80(75.5)
2 非行をしている友達がいなかった	1(0.9)	11(10.4)	2(1.9)	14(13.2)
3 非行をやる意味がわからなかった	1(0.9)	30(28.3)	3(2.8)	34(32.1)
4 現在や将来の目標、夢	2(1.9)	18(17.0)	2(1.9)	22(20.8)
5 社会や学校、クラスに適応する能力	4(3.8)	26(24.5)	1(0.9)	31(29.2)
6 ポジティブな感情体験	4(3.8)	30(28.3)	3(2.8)	37(35.0)
7 日常生活における「居場所」	7(6.6)	34(32.1)	2(1.9)	43(40.6)
8 所属するコミュニティとの良い関係性	8(7.5)	34(32.1)	3(2.8)	45(42.5)
合計	41(38.6)	243(229.3)	22(20.7)	306(288.6)

最も多かったのが「1 非行はやってはいけないものという理解」で、回答者の75.5%が該当し、次いで「所属するコミュニティ（家族、友達グループ、部活仲間など）との良い関係性」（42.5%）、「日常生活における『居場所』（友達、家族、学校、部活、塾など）」（40.6%）であった。最も少なかったのは「非行をしている友達がなかった」（13.2%）であった。

### (2) 中学生時の社会への関心度

中学生時の自分に当てはまるものの選択を求めた。結果は表5と表6の通りである。

表 5-1

	毎日して いた	たまにし ていた	ほとんどし ていない	全くして いない	わから ない	合計 (人・%)
ニュースや新聞を 読む	12 (11.3)	49 (46.2)	31 (29.2)	14 (13.2)		106 (100.0)
近所や地域の人へ の挨拶	30 (28.3)	60 (56.6)	9 (8.5)	5 (4.7)	2 (1.9)	106 (100.0)

表 5-2

	頻繁にし ていた	たまにし ていた	ほとんどし ていない	全くして いない	わから ない	合計
ボランティアへの 参加	1 (0.9)	21 (19.8)	42 (39.6)	42 (39.6)		106 (100.0)
地域の行事への参 加	21 (19.8)	54 (50.9)	18 (16.9)	12 (11.3)	1 (0.9)	106 (100.0)

表 5-3

	知ってい た	少しだけ 知ってい た	ほとんど知 らなかった	全く知ら なかった	わから ない	合計
近所の人の名前や 顔を知っていたか	40 (37.7)	51 (48.1)	9 (8.5)	5 (4.7)	1 (0.9)	106 (100.0)

表 6 「中学生時の社会への関心度（ニュースや新聞を読む）」と「中学生時の非行状況」の  
クロス集計結果

中学生時の非行状況	ニュースや新聞を読む					合計 (人)
	毎日 して いた	たまに してい た	ほとん どして いない	全くし ていな い	わから ない	
非行を行っていた	0	2	0	0	0	2
非行を1、2回行ったことがあるがすぐにやめた	0	1	0	1	0	2
非行を行いたいと思ったがしなかった	0	2	4	0	0	6
非行をしようと思わなかった	12	43	27	12	0	94
無回答	0	1	0	1	0	2
合計	12	49	31	14	0	106

表 5-1 を見ると、「ニュースや新聞を読む」という項目で最も多かったのは「たまにして  
いた」49人(46.2%)で、次いで「ほとんどしていない」31人(29.2%)であった。

「ボランティアへの参加」は「ほとんどしていない」と「全くしていない」が42人(39.6%)  
で同数であった。



「近所や地域の人への挨拶」で最も多かったのは「たまにしていた」60人(56.6%)で、次いで「毎日していた」30人(28.3%)が多かった。これは地域環境によっても異なると思われるが、ほとんどの人が近所や地域の人への挨拶をしていたことになる。

「近所の人の名前や顔を知っていたか」で最も多かったのは「少しだけ知っていた」の51人(48.1%)で、次いで「知っていた」の40人(37.7%)であった。これは8割以上の人が近所の人の名前や顔を少しは知っていたことになる。また、地域や環境にもよると思われるが、「全く知らなかった」と回答した人は5人(4.7%)いた。

「地域の行事への参加」については、「たまにしていた」の54人(50.9%)が圧倒的に多かった。

「ボランティアへの参加」は他の4つに比べてしていない人が多く(「毎日していた」が1人・0.9%、「たまにしていた」が21人・19.8%)、これは機会の有無に個人差があるからであると思われる。

表6は「中学生時の社会への関心度(ニュースや新聞を読む)」と「中学生時の非行状況」のクロス集計結果である。「非行を行っていた」「非行をしようとも思わなかった」群では「たまにしていた」が一番多い(2人・43人)が、「非行を行いたいと思ったがしなかった」群では「ほとんどしていない」が一番多くなっている(4人)。

### (3) 中学生時の非行状況

中学生時の自分に一番近いものの回答を求めた。結果は表7の通りである。

なお、ここでの「非行」とは、先に述べたように「無銭飲食・暴力団などと関係をもつ・飲み屋街への出入り・万引き・ケンカして怪我をさせる・覚せい剤・シンナーなどの使用・無免許運転・援助交際・風俗店勤務など・バイクなどでの暴走行為 など」とした。

「非行をしようとも思わなかった」が最も多く、94人で88.7%であった。次に多かったのは「非行を行いたいと思ったがしなかった」で、6人で5.7%であった。また、「非行を行っていた」「非行を1、2回行ったことがあるがすぐにやめた」という人はそれぞれ2人いた。

表7 中学生時の非行状況

中学生時の非行状況	人 (%)
非行を行っていた	2 (1.9)
非行を1、2回行ったことがあるがすぐにやめた	2 (1.9)
非行を行いたいと思ったがしなかった	6 (5.7)
非行をしようとも思わなかった	94 (88.7)
無回答	2 (1.9)
合計	106 (100.0)

### (4) 中学生時に非行を行わなかった・続けなかった理由

この質問は前項で「非行を行っていた」と答えた以外の人に単回答で回答を求めた。非行を抑制した要因として、回答者が一番強く認識している理由を知るためである。結果は表8の通りである。

最も多かったのは「1 非行はやってはいけないものという理解」で、57人(54.8%)で、次いで「3 非行をやる意味がわからなかった」で29人(27.9%)であり、この二つで全回答の8割強を占めた。

また、「9 その他(自由記述)」には「やろうと思わなかったから」、「非行をしている友達を見て、自分はやりたくないと思ったから」、「こわいというのと、迷惑をかけて大事になるのが嫌だったので」という回答があった。

表 8-1 非行を行わなかった・続けなかった理由

回 答	男	女	性別不明	合計(人・%)
1 非行はやってはいけないものという理解	12(11.5)	41(39.4)	4(3.8)	57(54.8)
2 非行をしている友達がいなかった		3(2.9)		3(2.9)
3 非行をやる意味がわからなかった	3(2.9)	26(25.0)		29(27.9)
4 現在や将来の目標、夢	1(1.0)		2(1.9)	3(2.9)
5 社会や学校、クラスに適應する能力	1(1.0)	2(1.9)		3(2.9)
6 ポジティブな感情体験		1(1.9)		1(1.9)
7 日常生活における「居場所」		1(1.0)		1(1.0)
8 所属するコミュニティとの良い関係性		2(1.9)		2(1.9)
9 その他		3(2.9)		3(2.9)
無回答			2(1.9)	2(1.9)
合計	17(16.3)	79(76.0)	8(7.7)	104(100.0)

表 8-2 非行を行わなかった・続けなかった理由(男女別順位)

順位	男 n=17	女 n=79
1	非行はやってはいけないものという理解	非行はやってはいけないものという理解
2	非行をやる意味がわからなかった	非行をやる意味がわからなかった
3	現在や将来の目標、夢 社会や学校、クラスに適應する能力	非行をしている友達がいなかった その他

表 8-1 の結果を、冒頭の長瀬らの調査結果(表 1-1)の枠組みに当てはめて再掲したのが表 8-2 である。男、女共に、1位は「非行はやってはいけないものという理解」2位は「非行をやる意味がわからなかった」という結果になった。

表 9-1 「非行を行わなかった・続けなかった理由」(問 4)と「中学生時の非行状況」のクロス集計結果

理由 \ 非行状況	非行を 1, 2 回行ったことがあるが	非行を行いたいと思ったがしなかった	非行をしようとも思わなかった	合計

理由

	すぐにやめた												合計
	男	女	不明	男	女	不明	男	女	不明	男	女	不明	
非行はやってはいけないものという理解				1	3		11	38	4	12	41	4	57
非行をしている友達がいなかった								3			3		3
非行をやる意味がわからなかった							3	26		3	26		29
現在や将来の目標、夢				1					2	1		2	3
社会や学校、クラスに適応する能力	1							2		1	2		3
ポジティブな感情体験								1			1		1
日常生活における「居場所」		1									1		1
所属するコミュニティとの良い関係性								2			2		2
その他					1			2			3		3
合計	1	1		2	4		14	74	6	17	79	6	102

表 9-1 は「非行を行わなかった・続けなかった理由」を「中学生時の非行状況」とのクロス集計結果である。この結果を冒頭の長瀬らの調査結果(表 1-2、1-3)の枠組みに当てはめたのが表 9-2、表 9-3 である。

ここの「非行脱却群」は本調査では「非行を 1、2 回行ったことがあるがすぐにやめた」層が該当し、「非行抑制群」は「非行を行いたいと思ったがしなかった」層が該当し、「非行無関心群」は「非行をしようとも思わなかった」層が該当する。

表 9-2 各群における「非行を行わなかった・続けなかった理由数」の順位(男各群別)

順位	男子 非行脱却群 n=1	男子 非行抑制群 n=2	男子 非行無関心群 n=14
1	社会や学校、クラスに適	非行はやってはいけな	非行はやってはいけないも

	応する能力	いものという理解 現在や将来の目標、夢	のという理解
2	_____	_____	非行をやる意味がわからなかった

表 9-3 各群における「非行を行わなかった・続けなかった理由」数の順位(女各群別)

順位	女 非行脱却群 n=1	女 非行抑制群 n=4	女 非行無関心群 n=74
1	日常生活における「居場所」	非行はやってはいけないものという理解	非行はやってはいけないものという理解
2	_____	その他	非行をやる意味がわからなかった
3	_____	_____	非行をしている友達がいなかった

「非行抑制群」において、男女共に「非行はやってはいけないものという理解」が第1位である。また「非行無関心群」において、男女共に「非行をやってはいけないものという理解」が第1位、「非行をやる意味がわからなかった」が第2位である。

(5) 「非行抑制要因」の該当個数と「中学生時の非行状況」との関係

表 10 「非行抑制要因」(問1)の該当個数と「中学生時の非行状況」のクロス集計結果

非行状況 \ 個数	個数										平均 (個)	合計 (人)
	0 個	1 個	2 個	3 個	4 個	5 個	6 個	7 個	8 個			
非行を行っていた	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1.0	2	
非行を1、2回行ったことがあるがすぐにやめた	0	0	1	0	0	1	0	0	0	3.5	2	
非行を行いたかったがしなかった	3	0	1	1	0	0	1	0	0	1.8	6	
非行をしようとも思わなかった	3	22	19	16	12	6	9	5	2	3.1	94	
無回答	0	1	0	0	0	1	0	0	0	3.0	2	
合計	7	23	22	17	12	8	10	5	2	2.9	106	

問1で、回答者に環境としてどのような「非行抑制要因」が備わっていたかを複数回答で求めたが、その各回答者の個数について「中学生時の非行状況」とのクロス集計をしたのが表10である。

各非行状況の平均個数は、「非行をおこなっていた」層が1.0個、「非行を1、2回行った

ことがあるがすぐにやめた」層が 3.5 個、「非行を行いたいと思ったがしなかった」層が 1.8 個、「非行をしようとも思わなかった」層が 3.1 個であった。

### III 考察

#### 1 先行研究との比較検討

本研究の主目的は、長瀬らの行った調査の枠組みを使用して著者の所属する大学生への調査を行い、その結果を検証、比較することにあつた。

そこで、長瀬らの調査結果表 1-1 と本研究の結果表 8-2 を比較すると、長瀬らの調査では最も影響のあつたクラスターは男では「社会の中で生きていくスキル」であつたが、本調査では「非行はやってはいけないものという理解」(長瀬らの「非行行動に対する道徳的理解」)であつた。女では、長瀬らの調査での第 1 位は「日常生活における居場所の存在」であつたが、本調査結果では男と同じ「非行はやってはいけないものという理解」(長瀬らの「非行行動に対する道徳的理解」)となっている。長瀬らが分析枠組みを男女別に設定したのは、非行行動への性差の影響が示された多くの先行研究(小林 2003 等)を意識したものであるが、本調査においては男女の順位に違いはみられない。長瀬らは、調査結果から男性においては「外発的要因」が、女性においては「個人内での他者との情緒的なつながりや居場所といった内発的な要因が非行行動の抑制に影響を与えている」と示唆しているが(長瀬・桂川・藤井他 2011:74)、本調査ではその知見との一致はみられなかつた。また、長瀬らの「各群における頻出クラスター」(表 1-2、表 1-3)と本調査での結果(表 9-2、表 9-3)を比較すると、男の「非行脱却群」と「非行抑制群」において第 1 位は一致するが、「非行無関心群」においては男女共に第 3 位までのクラスターとの一致はみられなかつた。このように本調査においては、非行抑制要因として「非行はやってはいけないものという理解」(長瀬らの「非行行動に対する道徳的理解」)、「非行をしている意味がわからなかつた」(長瀬らの「非行行動の意味との直面化」)という回答が全回答の 8 割を占めたが、この結果が何に起因するかは、後述の本研究の限界にも関連するがさらなる調査や分析が必要であろう。また、本調査結果のように思春期に「非行行動に対する道徳的理解」があり、「非行行動への意味との直面化」があつた、いわば「よい子」であつたとしても、必ずしも非行と無縁とはいえないという点については後述する。

本研究で示唆されたように非行抑制要因が「非行に対する道徳的理解」にあるのであれば、非行を未然に防ぐには家庭や学校などで「道徳的理解」を進めるための教育が望まれるが、その内容と方法については改めて詳細な検討が必要である。本研究では「非行をやってはいけないものという理解」は「非行抑制群」でも「非行無関心群」でも第 1 位であつたが、「非行を行ったことがない者の抑制要因と、非行を 1 度でも行ったことのある者のその後の非行に対する抑制要因には質的な違いがある」(長瀬・桂川・藤井他 2011:74)ことを意識して効果的な対策を考える必要がある。また、長瀬らの調査では、男女ともに「非行無関心群」において非行接触(非行を行っていた人間が周りにいた)があつた群のみ、クラスター抽出の基となる構成要素において「嫌悪感」が挙げられ、非行に対する嫌悪的なイメージが非行抑制要因になりうることを示唆したが(長瀬・桂川・藤井他 2011:75)、これは本調査結果の自由記述にもうかがわれたことである。非行を未

然に防ぐための教育に当たっては、従来非行の促進要因として挙げられてきた非行行動をしている集団への接触や非行に関する知識や情報の獲得が場合によっては非行行動の抑制に効果的に働きうることも意識すべきである(長瀬・桂川・藤井他 2011:76)。

## 2 思春期の非行と「よい子」の非行

表 10 は「非行抑制要因」の該当個数を調べたものと「中学生時の非行状況」のクロス集計結果を表している。

表 10 を見ると、「非行を行っていた」と「非行を行いたかったがしなかった」層(非行抑制群)の非行抑制要因の数の平均が、他の二つに比べて低いことがわかる(平均 1.0 個・1.8 個)。非行抑制要因は、「非行を行っていた」、「非行を 1、2 回行ったことがあるがすぐにやめた」(非行脱却群)、「非行を行いたかったがしなかった」(非行抑制群)、「非行をしようとも思わなかった」(非行無関心群)の順で多くなっていくように思える。しかし調査結果では「非行を 1、2 回行ったことがあるがすぐにやめた」層(非行脱却群:平均 3.5 個)より、「非行を行いたかったがしなかった」層(非行抑制群:平均 1.8 個)の方が、非行抑制要因が少なかった。特に、「非行を行いたかったがしなかった」層(非行抑制群)の半数(3 名)が、「非行抑制要因」が全く無く、一つ間違えば非行に走りかねなかった深刻な状況であった可能性がある。

木村は、思春期の非行について「思春期になった子どもたちのほとんどが、一過性の非行や問題行動を体験し、その危険な時期を通過して大人になっていくもの」と述べている(木村 2011:49)。

一方で、一見非行とは関係ないように見える子について、佐々木は「『よい子』だから何も問題がないと思ってしまいがちであるが、悩みや問題のない子どもはひとりもない」とし、「むしろ『よい子』ほど、不安感や迷いなどを心の奥底に押し込んでいる」と述べ、悩みなどを抱えがちである「よい子」の危険性を述べた(佐々木 2012:17)。

木村の見解によるならば、調査結果の「非行を行っていた」、「非行を 1、2 回行ったことがあるがすぐにやめた」層(非行脱却群)の方が、思春期の少年としては心配する必要はないと思われる。むしろ環境に非行抑制要因が無い状態で「非行を行いたかったがしなかった」層(非行抑制群)が、佐々木のいう「不安感や迷いなどを心の奥底に押し込んでいる」状況にあったのではないかと推察される。本研究により、長瀬らのいう「非行念慮」という状態に着目し、非行をせず悩みを表出できない子へ目を向けることの重要性が示唆された。

## 3 社会への関心度と非行状況

最後に表 6「中学生時の社会への関心度(ニュースや新聞を読む)」と「中学生時の非行状況のクロス集計結果」を基に、「社会への関心度」と非行状況との関連について考察する。

ここでは「ニュースや新聞を読む」頻度が高いほど、「社会への関心度」が高いとする。

「非行を行っていた」、「非行をしようとも思わなかった」層(非行無関心群)では「たまにしていた」が一番多い(2 人・43 人)が、「非行を行いたかったがしなかった」層(非行抑制群)では「ほとんどしていない」が一番多くなっている(4 人)。これは「非行を行いたかったがしなかった」群(非行抑制群)の方が「社会への関心度」は低いというこ

とになる。

前述の 2 で「非行を行いたいと思ったがしなかった」層(非行抑制群)の方が、悩みを抱えていた可能性が高いのではないかと推察した。これは、「非行を行いたいと思ったがしなかった」層(非行抑制群)が佐々木の述べるように「不安感や迷いなどを心の奥底に押し込め込んで」おり、社会に関心を向ける余裕がなかったことのひとつの表れではないかと考えられる。

#### 本研究の限界と課題

本研究の最大の課題は、サンプルの偏りが懸念されることである。長瀬らの調査では一定数得られた「非行脱出群」「非行抑制群」に属する回答が極小数に留まり、分析は困難であった。偏りの原因は、長瀬らの調査の限界にも挙げられているが、特に本調査が「非行」として掲げた内容に鑑み、本来は「非行脱却群」に該当する学生の多くが調査に非協力的になる可能性があることがある。また、対人援助職養成校という特色を持つ N 大学での調査では回答者の性向に偏りがあり、結果に影響したことも十分推察される。したがって、現段階では本研究成果を一般化することはできない。今後研究を進めるにあたっては、サンプルをより幅広いフィールドから収集することを試みるのが不可欠である。

#### 謝 辞

本調査にご回答くださった N 大学の学生の皆様、本稿にご協力いただきました皆様に心より感謝を申し上げます。

#### 【文献】

- 小保方晶子・無藤隆「中学生の非行傾向行為の実態と変化：1 学期と 2 学期の比較」お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 1. 89-95. 2004
- 木村隆夫『非行をのりこえる一家族の絆を信じてー』子どもの未来社. 2011
- 久世敏雄・和田実・鄭暁齊・他『現代青年の規範意識と私生活主義について』名古屋大学教育学部紀要. 教育心理学科 35. 21-28. 1988
- 小林寿一「我が国の地域社会における非行統制機能について」. 犯罪社会学研究(28) 39-54 2003
- 佐々木光郎「思春期での『よい子』の非行」教育と医学 60(7). 2012
- 長瀬 裕子・桂川 泰典・藤井 靖・菅野 純  
「思春期における少年非行の抑制要因の検討」早稲田大学臨床心理学研究(10)69-79. 2011
- 永房典之「非行抑制機能としての恥意識に関する研究 平成 14 年度研究助成最優秀論文」社会安全(52). 2004
- 中村真・松井洋・堀内勝夫・他「親子関係と青少年の非行的態度(4)親子関係、恥意識、非行的態度の関連性」川村学園女子大学研究紀要 21(1). 167-177. 2010
- 法務省『平成 24 年版 犯罪白書』2012
- 法務省『平成 26 年版 犯罪白書』2014
- 松井洋・中村真・堀内勝夫 他『非行的態度の抑制要因に関する研究』川村学園女子大学研究紀要 16(1). 27-44. 2005

「非行の抑制に必要な要因とは何か」に関するアンケート調査票

	<p>◇ あなたについて教えてください（あてはまるものに○をつけてください）。</p> <p>1. A学科 2. B学科 3. C学科 1. 男 2. 女</p>
質問1	<p>中学生の時の自分について当てはまると思うもの<u>すべて</u>に○をつけてください（複数回答）。</p> <p>1 非行はやってはいけないものという理解 2 非行をしている友達がいなかった 3 非行をやる意味がわからなかった 4 現在や将来の目標、夢 5 社会や学校、クラスに適応する能力 6 褒められることや勉強や部活で成果をあげるなど、ポジティブな感情体験 7 日常生活における「居場所」（友達、家族、学校、部活、塾など） 8 所属するコミュニティ（家族、友達グループ、部活仲間など）との良い関係性</p>
質問2	<p>中学の時の自分にあてはまるものにそれぞれ○をつけてください。</p> <hr/> <p>■ニュースや新聞を読む</p> <p>1 毎日していた 2 たまにしていた 3 ほとんどしていない 4 全くしていない 5 わからない</p> <hr/> <p>■ボランティアへの参加</p> <p>1. 頻繁にしていた 2. たまにしていた 3. ほとんどしていない 4. 全くしていない 5. わからない</p> <hr/> <p>■近所や地域の人への挨拶</p> <p>1 毎日していた 2 たまにしていた 3 ほとんどしていない 4 全くしていない 5 わからない</p> <hr/> <p>■近所の人の名前や顔を知っていたか</p> <p>1 知っていた 2 少しだけ知っていた 3 ほとんど知らなかった 4 全く知らなかった 5 わからない</p> <hr/> <p>■地域の行事（祭りの出し物や町内会・子供会など）への参加</p> <p>1. 頻繁にしていた 2. たまにしていた 3. ほとんどしていない 4. 全くしていない 5. わからない</p>



質問 3	<p>以下から<u>中学生の時の自分</u>に一番近いものを<u>1つ</u>選んでください。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 「非行」を行っていた →質問は以上です、ありがとうございました。</li> <li>2 「非行」を1、2回行ったことがあるが、すぐにやめた →質問4へ</li> <li>3 「非行」を行いたいと思ったが、しなかった →質問4へ</li> <li>4 「非行」をしようともおもわなかった →質問4へ</li> </ol> <p>〔ここでの「非行」とは：無銭飲食・暴力団など関係をもつ・飲み屋街への出入り・万引き・ケンカして怪我をさせる・覚せい剤・シンナーなどの使用・無免許運転・援助交際・風俗店勤務など・バイクなどでの暴走行為 など をいいます。〕</p>
質問 4	<p><u>中学生の時の自分</u>が非行をやらなかった（続けなかった）理由に<u>一番近いもの</u>に<u>1つ〇</u>をつけてください。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 非行はやってはいけないものとわかっていたから</li> <li>2 現在や将来の目標、夢があったから</li> <li>3 社会や学校、クラスの中でうまくやれていたから</li> <li>4 褒められることや勉強や部活で成果をあげるなど、ポジティブな感情体験があったから</li> <li>5 日常生活における居場所があったから（友達、親、部活、習い事など）</li> <li>6 所属するコミュニティ（家族、友達グループ、部活仲間など）との関係性が良かったから</li> <li>7 非行をしている友達がいなかったから</li> <li>8 非行をやる意味がわからなかったから</li> <li>9 その他（ ）</li> </ol>

ご協力ありがとうございました。